

■入賞 猶 希世子（なお きよこ）さん・六十一歳／山口県宇部市在住

民間企業勤務後、公立・私立の中学校・高等学校にて約三十年間、一年契約の講師を続け現在に至る。

## 子育ての魅力

シングルマザーとして働きながら四人の子育てをしてきた。小児がんの長女は骨髄移植も含めて十四年間入院を繰り返した。残された子どもたちにも我慢させることが多かったが、それでも子育ては十分に楽しかったし、どんな仕事よりも尊いものだと思っている。

今、国レベルで社会保障制度に危険信号が灯っている。皆が根本的な原因は少子化だと気づいているのに、なかなか将来の日本を支える子ども数は増えない。自分が子育てをしていて一番困ったのは健康保険制度だった。長女の病気のこともあり、身軽に労働環境を変えられる一年契約の教師を三十年間続けてきた。年度末か年度初めに必ず空白の数日間が発生するため、そのたびに健康保険も切られてしまう。四人の子どもたちも一緒に数日間、健康保険難民になった。国保に入るなどの細かい手続きをする知恵もなく、実際役所に向く余裕もない日々だった。国民皆保険を唱えるのなら、健康保険の一本化はできないものだろうか。環境が変わっても手続きなしで公的な健康保険に加入し続けることができ、同一医療に対して同一負担であって欲しいと願う。

さて、若い人たちが子どもを産み育てたいと思うには何が足りないのだろうか。お金がかかる、自分の自由時間がなく

なるという話を聞く。確かにそうかもしれない。しかし、子育てが気づかせてくれる大切な経験はお金では買えない貴重なものだ。娘は白血病を再発したが、運良くドナーが見つかり骨髄移植を受けるためにがんセンターに転院した。自分は非常勤講師として週の半分は地元で働きながら下の三人の子どもたちと生活を共にし、残りの半分は片道三時間の病院に泊まって長女の看病をした。私と交代で子どもたちの世話をし、病院にも泊まってくれる母の存在があったからこそできたことだ。子育ては大切な局面で手伝ってくれる人がどうしても必要になる。明日の生命の保障のない看病の毎日の中で、それでも学校に行けばそこに元気な生徒たちが居て、社会とつながっていることが自分の心を折れないようにしてくれた。

六十歳になってもまだ高校で非常勤講師を続けさせてもらっているが、生徒に囲まれ気力も体力もあり、自由な時間はむしろ増えている。地元の小学校で絵本の読み聞かせボランティアを楽しんでいるが、若い人たちの子育ての手助けをしたいという思いから、保育士資格の取得を目指した。ただたま娘が持っていた二冊の本を借りて独学が始まった。九教科もあり、中でも児童家庭福祉や社会的養護分野は時代を経

て様々な法律が作られ現在も多くの課題があることを知った。少子化問題を真剣に考えるなら、子育てはステレオタイプな夫婦がするものという考え方から離れる柔軟性が必要かもしれない。保育士の九教科の中には高齢者や障害者を含む社会福祉全般もある。娘のように外見からは分からないが、定期的に治療の必要な患者に対する福祉は遅れている。一人前に働く体力はないが、将来のことを考えると社会保険に入って年金を払っていくことが望ましい。無理な働き方をして再入院をすることもあった。保育士の二次試験はとても楽しいものだった。ピアノの弾き語りの試験会場にはグラランドピアノが置いてあり、その音色に嬉しくなって思わず体でリズムをとりながら歌ってしまった。晴れて保育士の資格をもらえたが、勉強の過程で調べたり考えたりしたことは貴重だった。

次に挑戦しているのはアコーディオンだ。持ち運べるという利点もあるし、コードだけで伴奏できるのも魅力だ。独学だが、いつか役に立てる日を夢見ている。子どもたちは社会全体で育てるという気持ちで、微力ながら子育ての応援を続けたいと思う。

